

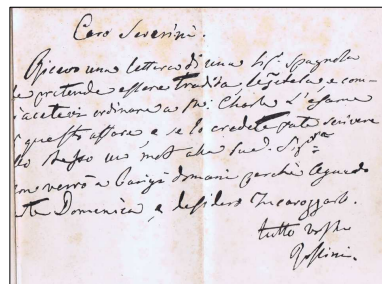
ロッシーニ書簡集の過去と現在

(日本ロッシーニ協会ホームページ用の書き下ろし。2012年11月)

水谷 彰良

ロッシーニ書簡の出版

ジョアキーノ・ロッシーニがその生涯に何通の手紙を書いたのか想像もつかないが、筆者が把握するだけでも700を超えている。後述するように、1892年にまとまった書簡集が出版されるまでロッシーニの手紙は主に音楽新聞、雑誌、ロッシーニ伝への転載を通じて知られ、19世紀半ばにはオリジナルの複製も登場している(例:1855年に出版されたミルケールのロッシーニ伝の付録。右図参照)。



自筆書簡の複製は筆跡によって真贋の特定が可能だけでなく、オリジナルを消失してもこれが確かに存在したことの証明となる(自筆楽譜の複製も同様で、ロッシーニ作品には19世紀のファクシミリ複製のみで存在を確認できる例がある)。これに

対し、印刷物への文章転載は第三者による活字への置き換えのためオリジナルの内容を正しく反映するとはかぎらず、縮小や改変、さらには贋作を含む問題をはらんでいる。現在進行中のロッシーニ財団による『書簡とドキュメント』(後出)は、こうした諸問題の解決をも意図しており、ロッシーニ研究の重要な基礎資料となるものである。

とはいえ『書簡とドキュメント』の完結にはなお数十年の歳月を要するため、当面の研究には過去の書簡集の使用も不可避となる。そこで次に、過去に刊行されたまとまった書簡集について紹介しておきたい。

19世紀末～20世紀に出版されたロッシーニ書簡集

19世紀に出版された重要なロッシーニ伝の一つ、アントーニオ・ザノリーニの『ロッシーニ伝』(Antonio Zanolini, *Biografia di Gioachino Rossini*, Bologna, Nicola Zanichelli, 1875.)には、自筆書簡の複製1点のほか、付録に21の書簡が転載されている。しかし、本格的な蒐集と調査に基づく書簡集の出版は、作曲家生誕100周年の1892年にイモラで刊行されたG・マッツァティンティ編『G.ロッシーニの未出版で貴重な書簡集』(*Lettere inedite e rare di G. Rossini*)が最初である(196通の手紙を掲載。下記①)。編者ジュゼッペ・マッツァティンティ(Giuseppe Mazzatinti, 1855-1906)は1887年からフォルリの市立図書館長を務め、ロッシーニ以外にもアルフィエーリやマッツィーニの書簡集を編纂出版した書誌学者である。

マッツァティンティは10年後の1902年、2人の共編者と作成した増補新版をフィレンツェで出版した(次頁②)。掲載書簡は358通に増え、これが20世紀における基本文献となり、1975年に復刻版、1980年に新版が出版されている。ロッシーニ生誕200周年の1992年には②をベースにしたエンリーコ・カスティリオーネ編のロッシーニ書簡集も出版され、掲載された手紙の総数も6通増えて364通となった(③)。とはいえこの段階で未掲載の自筆書簡が多数確認されており、一連の書簡集はもはや過去のものとなっただけでなく、校訂上の問題も浮上していた。マッツァティンティ編の書簡集には明らかに贋作と思われるものや、典拠や初出段階の改竄を伴う手紙が含まれていたからである。未掲載の手紙も数百にのぼり、筆者も1992年の時点で書簡集に未掲載のロッシーニ自筆書簡7通を所蔵していたほどだ。

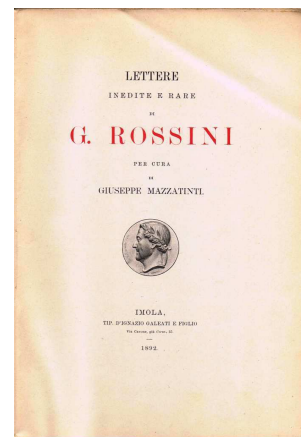
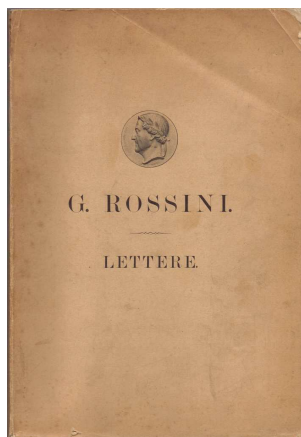
以上が、後述する『書簡とドキュメント』に先立つ書簡集のあらましである(さまざまな図書館や資料館における所蔵目録、特定の宛先の書簡をまとめた小冊子、新発見の書簡の公刊やオークション目録を除く)。

① *Lettere inedite e rare di G. Rossini per cura di Giuseppe Mazzatinti*

(ジュゼッペ・マッツァティンティ編『G.ロッシーニの未出版で貴重な書簡集』)

Imola, Tip d'Ignazio Galeati e figlio, 1892., IX, 197 pp+ Indice

註: 本格的なロッシーニ書簡集の最初の出版で、年代順に196通の手紙を掲載。初版を1890年イモラとする文献もあるが、筆者の調査では1890年版の存在は確認されず、序文にも1892年以前の出版に関する記述が無い。ペーザロ市への献辞日付がロッシーニ100年目の誕生日(1892年2月29日)であることから、マッツァティンティはこの日を前提に準備したのだろう(序文末尾の日付は1892年2月26日)。筆者はオリジナルの表紙をとどめるアイテムを所蔵している。



『G.ロッシーニの未出版で貴重な書簡集』(1892年)の外表紙とタイトル頁(本稿の図版はすべて筆者コレクションより)

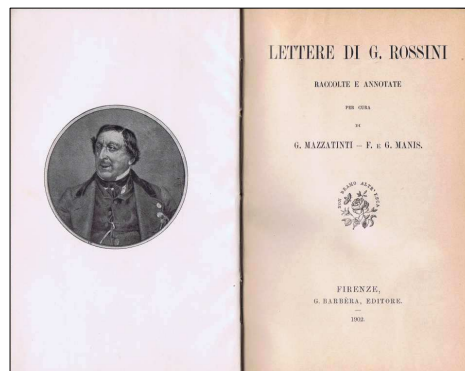
② *Lettere di G. Rossini, Raccolte e annotate per cura di G. Mazzatinti - F. e G. Manis*

(ジュゼッペ・マッザティンティ/F.及びG.マニス編・蒐集及び注記『G.ロッシーニ書簡集』)

Firenze, G. Barbera Editore, 1902., VI, 363 pp

註：掲載された書簡は358通。①に比して1.5倍に増えたものの、音楽雑誌に転載された書簡を数多く含む。共編者ファンニ・マニス (Fanny Manis, 1858/9-1943) はフィレンツェ国立中央図書館の司書であるが、もう一人のマニス (G. Manis) に関して筆者はまだ確かな情報を得ていない。筆者所蔵のアイテムは20世紀初頭のイタリアの高名な医師グリエルモ・ピランチョーニ (Guglielmo Bilancioni, 1881-1935) の旧蔵書で、製本された背表紙にタイトルとピランチョーニの名前が金文字で刻まれ、医師らしく見返しの蔵書ラベルに人体解剖実験のイラストが使われている。

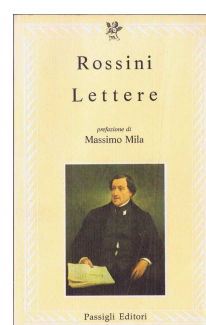
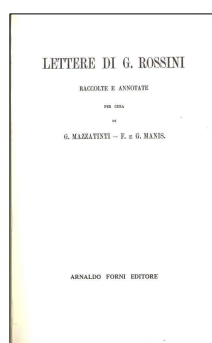
『G.ロッシーニ書簡集』(1902年)のタイトル頁と肖像画



このエディションは1975年に復刻版がボローニャで出版され (Bologna, A. Forni, 1975., VI, 363pp)、続いてマッシモ・ミーラ (Massimo Mila) の序文を伴う新版が1980年フィレンツェで刊行されている (Firenze, Passigli, 1980., XXVI, 363pp)。

復刻版(ボローニャ、1975年)のタイトル頁(左)

新版(フィレンツェ、1980年)の外表紙(右)



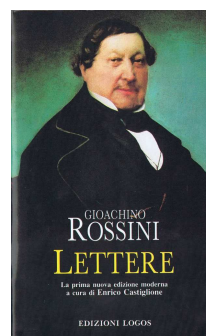
③ *Gioachino Rossini Lettere* (A cura di Enrico Castiglione)

(エンリーコ・カスティリオーネ編『ジョアキーノ・ロッシーニ書簡集』)

Roma, Edizioni Logos, 1992., VI, 327 pp

註：②をベースにした増補新版。掲載された手紙の総数は364通に増えている。ロッシーニ年譜とジョヴァンニ・カルリ・パッローラ (Giovanni Carli Ballola) による注記を含むが、出典や真贋の不明な書簡を②から引き継ぐなど校訂上の問題を残している (明らかに偽作の手紙も紛れ込んでいる)。なお、同書は下記『書簡とドキュメント』第1巻と同時期の出版である。

カスティリオーネ編『ジョアキーノ・ロッシーニ書簡集』



『書簡とドキュメント』による新時代の幕開け

20世紀の基本文献とされた②に掲載された書簡、とりわけ19世紀の音楽新聞や雑誌が初出の書簡に原文の縮小ないしは改変のあることは、折にふれ研究者によって指摘されてきた。また①～③に掲載されない数多くの自筆書簡やドキュメントが20世紀を通じて世に出ており、組織的かつ近代的な方法によるドキュメントを含む新たなロッシーニ書簡集の編纂が不可避となった。

批判校訂版ロッシーニ全集 (1979年刊行開始) が進むなか、ロッシーニ財団が新たに着手したのが『書簡とドキュメント (*Lettere e documenti*)』である。これはブルーノ・カーリ (Bruno Cagli) とセルジョ・ラーニ (Sergio Ragni) を共編者とする企画で、通常の往復書簡集の枠を超えたドキュメント集成を目的に、現存するすべてのロッシーニ書簡と関連文書史料を批判的注釈と共に網羅する企画である。第1巻 (下記④: 1792年2月29日～1822年3月17日) はロッシーニ生誕200周年の1992年にペーザロで刊行され、以後4年に1巻を目標に1996年に第2巻 (次頁⑤: 1822年3月17日～1826年10月11日)、2000年に第3巻 (次頁⑥: 1826年10月17日～1830年12月31日) が刊行されている。

④ *Gioachino Rossini, Lettere e documenti, vol. I* (a cura di Bruno Cagli e Sergio Ragni) Fondazione Rossini, Pesaro, 1992.

(ブルーノ・カーリ&セルジョ・ラーニ編『ジョアキーノ・ロッシーニ書簡とドキュメント』第1巻)

註：1792年2月29日～1822年3月17日の書簡とドキュメントを合計316点掲載 [N.1-N.316]。

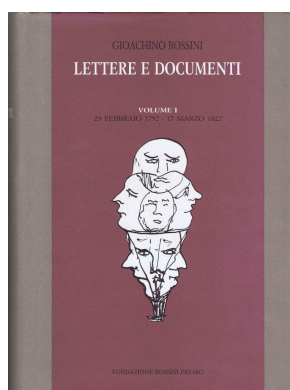
- ⑤ *Gioachino Rossini, Lettere e documenti, vol.II* (a cura di Bruno Cagli e Sergio Ragni) Fondazione Rossini, Pesaro, 1996.
 (ブルーノ・カーリ&セルジョ・ラーニ編『ジョアキーノ・ロッシーニ 書簡とドキュメント』第2巻)
 註：1822年3月17日～1826年10月11日の書簡とドキュメントを合計349点掲載 [N.317-N.665]

- ⑥ *Gioachino Rossini, Lettere e documenti, vol.III* (a cura di Bruno Cagli e Sergio Ragni) Fondazione Rossini, Pesaro, 2000.
 (ブルーノ・カーリ&セルジョ・ラーニ編『ジョアキーノ・ロッシーニ 書簡とドキュメント』第3巻)
 註：1826年10月17日～1830年12月31日の書簡とドキュメントを合計349点掲載 [N.666-N.1014]

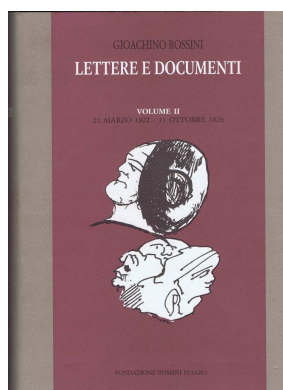
だが、第3巻が出版された直後、貴重なロッシーニ自筆楽譜の存在が明るみに出る。それが2001年12月7日にロンドンのサザビー・オークションにかけられた、ロッシーニの両親宛ての249通の自筆書簡である。これが衝撃的発見であることは、そもそも最初の3巻に掲載されたロッシーニ自身の書簡がきわめて少数で、ドキュメントと公的文書を中心としたのに対し、両親に宛てた書簡が完全にプライベートな内容だったことでも明白である。そこにはこれまで知られていなかった興行師との契約、作曲のプロセス、経済的な諸問題、さらには上演の成功と失敗に対するロッシーニ自身の感想や恋愛と病気、家族にだけ漏らすことの出来る本音など、オペラ作曲家ロッシーニの真実を知る上で貴重な証言が多数含まれていた。

ロッシーニ財団はペーザロ市その他の協力を得てこれを落札し、2004年に『書簡とドキュメント』第3a巻「両親への手紙」(1812年2月18日～1830年6月22日)として出版、大きな反響を呼ぶことになった。けれどもこれを最後に現在に至るまで『書簡とドキュメント』の出版は行われず、事実上中断した形になっている。

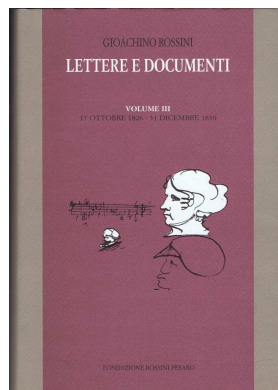
- ⑦ *Gioachino Rossini, Lettere e documenti, vol.IIIa Lettere ai genitori* (a cura di Bruno Cagli e Sergio Ragni) Fondazione Rossini, Pesaro, 2004.
 (ブルーノ・カーリ&セルジョ・ラーニ編『ジョアキーノ・ロッシーニ書簡とドキュメント』第3a巻 両親への手紙)
 註：ロッシーニが両親に宛てた1812年2月18日～1830年6月22日の書簡とドキュメントを合計246点掲載 [新たにN.1-N.246]



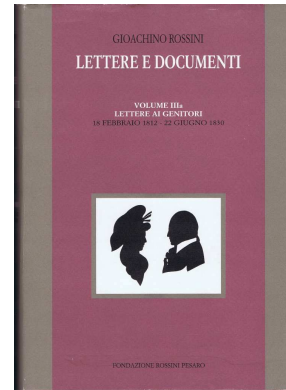
『書簡とドキュメント』第1巻



『書簡とドキュメント』第2巻



『書簡とドキュメント』第3巻



『書簡とドキュメント』第3a巻

付記：

筆者コレクションを含む日本に所蔵されるロッシーニ自筆書簡もまた、ロッシーニ財団が把握しているものはすべて『書簡とドキュメント』に掲載を予定している。既刊分では第2巻に武蔵野音楽大学附属図書館の所蔵がJ-Tm、第3巻に南葵音楽文庫の所蔵がJ-Ttmc、筆者の個人コレクションがJ-Tmizutaniの略号で掲載され、筆者所蔵は第4巻以降にも掲載予定である。

しかしながら、他にもロッシーニ財団の把握しない自筆書簡が日本に存在し、所蔵者も不明である。オークションの介入無しに古書店からネット購入が可能となった現在では対価を払えば誰もが容易に入手と転売ができ、それ自体は問題にしないとしても、真贋の検証には専門家の鑑定も必要である。ロッシーニの書簡には文面が第三者の筆で書かれ署名のみがロッシーニ自筆であったり、文面や署名と異なる筆跡で日付が書き加えられるケースがあり、その意味でも正式鑑定は不可欠といえよう。貴重な資料を死蔵・散逸させぬためにも、所蔵者にはロッシーニ財団への申告をお願いしたい(筆者による代行も可能につき、事務局までご一報いただきたい)。